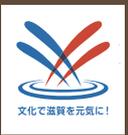


文化・経済フォーラム滋賀



News Letter

第6号 (2019年12月)

文化・経済フォーラム滋賀は、2011年の発足以来、様々な分野の方が一つの場に集まって交流しながら滋賀県を元気にしていこうと、文化で地域を元気にしている取り組みから先進事例を学んだり、実践者の報告や有識者のお話を伺うなどしてまいりました。来年10年目を迎えます。発足時に掲げた「文化で滋賀を元気に！」するために何ができるか、議論を一区切りし提言をまとめる予定です。

コーディネーター：加藤 賢治 氏（文化・経済フォーラム滋賀幹事、成安造形大学准教授）

アートは地域に何ができるか＜滋賀編＞

第1部 事例発表

宮本 結佳 氏（滋賀大学教育学部准教授）
田中 哲也 氏（陶芸家、IAC 国際陶芸アカデミー会員 ほか）
田口 真太郎 氏（株式会社まっせ マネージャー）

文化で滋賀を元気に！シンポジウム

2019年11月30日（土）14:00～16:30 / コラボしが21 大会議室

第2部 意見交換

コメンテーター

岡田 修二 氏（成安造形大学学長、画家）
川戸 良幸 氏（文化・経済フォーラム滋賀代表幹事、
（公社）びわこビジターズビューロー副会長）

■「アートと地域の出会い－瀬戸内海の島々の事例」 宮本結佳氏

アートと地域、互いに何ができるか、双方向の視点による関係が大事

アート作品を見るために旅をする、アートツーリズムと呼ばれる取り組みが非常に活発である。多くの人が訪れるので、地域振興として注目されている。作品の鑑賞に訪れた人は同時にその場所も体験し、作品を介して土地の暮らしや記憶も経験する。瀬戸内の事例から、地域の人がアートプロジェクトと出会い付き合っていく中で、それを自分たちのものにしてしながら取り組みを続けているところが持続可能な関係のポイントだと考えている。

■「越境 Cross Border－滋賀と世界 工芸とアート」 田中哲也氏

世の中のためにということ念頭に活動している作家は少ないかと思う。後から考えたらちょっとは役に立てたかなという感じ

滋賀県に軸足を置きながら海外でも活動している。自分の作品は工芸でもありアートでもある。学校での出前授業もしている。子どもたちには非日常的な授業で、モチベーションも高くなったりする。普段目立たない子どもでも粘土に触れることで素晴らしいものを作り注目されたり、一緒に友達と授業を受けられるようになった子もある。日韓関係の悪い時期に韓国で滞在制作をしたが、アートを介すると、もっと深いところで人として国際交流ができたかなと思った。

■「自然と文化を活かした地域づくり－近江八幡でのまちづくりの実践」

田口真太郎氏

コーディネーターがたくさんいればいるほど、地域は豊かになれる

まちづくり会社で、地域コーディネーターをしている。コーディネーターの役割は、行政、自治会、銀行、民間企業でもやっているが、今どこでも必要だと感じている。あいだをつなぐ人がいることで、地域はどんどん柔らかくなり、新しいものを受け入れるようになる。歴史や伝統を守ることは続けることであり、それを時代に合わせて変えていくことができる人、また地域の文化を翻訳し伝える人、こうした人がいることで地域が豊かになっていくと思う。コーディネーターは御用聞きかもしれないが、実際はやりたいことしかやっていない。地域の文化を活かし何に取り組むか、一人ひとりが主観を磨いていくことが大切で、高校生など次世代育成にも取り組んでいる。



■ 川戸良幸氏 アーティストというより、田口さんのような役割を担う“アート人”が地域に何ができるかではないかと感じた。

■ 岡田修二氏

「地域はアート使って何ができるか」に主語を置き換えて考える

なぜなら地域が組織的に、かつ恒常的に何かしようとするときには、単発的な個々の活動ではなくて、（主語になる）意識が必要だから。「アートを使う」とすると、目的の一つは心の未来、さまざまなつながりの回復。人間だけではなく地理的なもの、風景や出来事、歴史などとの結び付き。もう一つは社会。共生社会とよく言われるが、相互理解、許し合う心とか、多様な価値観を認め合うとか、開放的な社会の実現。

そして、地域全体の創造性を高めていくこと。潜在する創造性を高めていく、開放していくことは、かなり教育的側面を持つ。アーティストだけが創造性を担うわけではない。つまり福祉・教育、芸術というのは横断していて、すごく大きな力を発揮する可能性を持っている。創造的活力を生み出して、それが結果的に地域の生産力の向上につながるのではないかと。地域でアートを使いこなす目的をみんなで議論して、地域からの主体性をちゃんと持っていくことが必要なのではないかと思う。

文化経済サロン①／滋賀県立文化産業交流会館共催「ビジネスカフェ」を開催 9月4日(水)・滋賀県立文化産業交流会館第1会議室 世界のエリートはなぜ『美意識』を鍛えるのか? ～経営における「アート」と「サイエンス」～

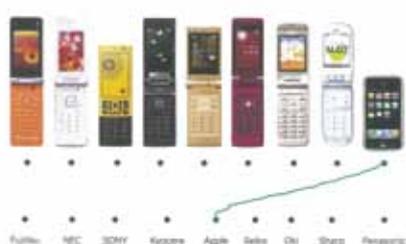
講師 山口 周氏 作家

過剰化する正解・ソリューションと希少化する問題・アジェンダ

皆さん日々、意思決定していますよね。判断の立脚点になるのが、理性と感性。法規制、ルール、慣習、あるいは市場調査などデータを集めて論理的に考えるのが、理性に基づく考え方。でも全て理性で判断しているわけではない。感性は五感、肌ざわりだとか、匂いみたいなもの。理性も感性も両方大事。しかし、組織の中で人を説得しようと思ったら、必ず理性、サイエンスが必要になる。理性を使えることが世の中の価値に結び付いている時代は、これで良かった。ここ 20、30 年は理性の価値が失われている時代だと思う。世の中で何が過剰で、何が希少なのかということを考えていけば分かりやすい。当たり前だが、過剰なモノの価値は下がり、希少なモノの価値が上がる。今、過剰なモノの一つは正解・解決策。逆に、解こうとする問題、課題が希少になっている。

マーケティングのパラドックス

Connect Cell-Phones and Manufacturers with lines (2007 Model)



(山口氏の講演資料より)

2007 年に発売された携帯電話を並べると、Apple 社の iPhone を除いて見た目も機能もほとんど同じ。なぜこうなったかという、これが正解だから。正解は原理的に同じになる。メーカーは消費者調査を頻繁に行っていた。ところが Apple 社は、消費者調査をほとんどやらない。自分たちが格

差をつける。メーカーは消費者調査を頻繁に行っていた。ところが Apple 社は、消費者調査をほとんどやらない。自分たちが格

好いと思うかどうか判断の基準、まさにアート、感性。「顧客に聞いたら赤いほうが受けるから赤を入れる」というアーティストはいない。グローバル化の中で Apple、Google に代表されるような極めて感性的な意思決定の仕方をする会社の存在がどんどん増している、ということを変えて考えなくては行けない。

「役に立つ」が評価されず、個人にとっての「意味」が重視される

コンビニエンスストアはある種、市場の縮図。店舗が狭く商品の数を少なくしたい。文房具もだいたい 1 種類か 2 種類。ここで、200 種類以上置かれているのがタバコ。一番役に立つものは 1 個あれば他はいらないが、意味は多様化する。つまり一番役に立つ会社以外はほとんど残れないことになる。検索エンジンも、Google が世界シェア 90% 以上となった。世界にはほぼ 1 社となってしまったのである。だって、意味のある検索エンジンはいないでしょう。

昭和的価値観と戦略定石の終わり

あと数年もすると、理性に基づいて正解を出すことに優れた AI (人工知能) が身近になる時代がやってくる。人間に残された仕事は何なのか。軸足をアート側に移さないと、なかなか新しい価値というのは生み出せない。これは地域も同じ。昭和の時代は、とにかく便利で使い勝手が良く、効率が良くということに乗っかろうとし、日本の地方は小さな東京を目指していた。東京は 1 個あればいい。他の地方は、その地域の持っている意味合いをどう作っていくのが大事ではないか。

文化経済サロン②／滋賀県公立文化施設協議会共催「トップセミナー」を開催 12月13日(金)・びわ湖ホール研修室 文化芸術と地域の活性化 ー共生社会の実現に向けてー

12月13日(金)・びわ湖ホール研修室

講師 中島 諒人氏 NPO 法人鳥の劇場 芸術監督

障がいのある人と一緒に芝居づくりをしている。演劇は、言葉とか体の動きを生む前の体の内的な変化でコミュニケーションする。これを演劇表現の平等性と言っている。私たちは障がいばかりを気遣いがちだが、芸術を媒介すると見えていなかったその人の中の魅力的なところが出てくることに気づく。そういう瞬間に出会える場をつくっていき、いわゆる共生社会を目指せないかとプロジェクトに取り組んでいる。

芸術が開く可能性、コミュニティの未来

人間の可能性を知ることができるのは、現代の社会状況の中でも意味のあることである。「鳥の劇場」は、鳥取という人口が全国で一番少ない県で、高齢化していて、農業のほか大きな産業があるわけでもない、いろいろな意味で先が見えない社会の中で、芸術を介して未来を考えたいと活動している劇団である。基本は現代



劇を上演している。芸術団体の価値というものを計るとき、どうしても社会、地域にどんな貢献をしているのかと問われる。それは大事だが、地域との関係をつくる土台として、芸術団体は全国あるいは世界に誇れるよ

うな芸術活動を目指さなければいけないと思う。私たちはレッスンプロを目指しているわけではなくて、一流の表現者として体験したこと、身に付けたことを地域に還元していくのが役割だと考える。

公立文化施設が果たすべき役割は、未来を実践することだと思う。実際に未来は実践できないが、未来の社会はこうあるべきという姿をモデル的に作り出すことはできる。私たちは具体的な形で見せられないと分からないことが多い。共生社会のコンセプトに反対する人はそんなにいないが、具体的には分かりにくい。例えば、演劇の進行の仕方、イメージの作り方によっては、決して障がいのある人は一方的に助けられる存在でなくて、私たちに多くのものをくれるんだ、ということを経験を通じて観る—それはある種、未来の実践である。未来の実践を通じて、未来の子どもたちの笑顔をつくっていくことが、今を生きる世代の義務だと思う。しかし、こうしたものは基本、商業的にペイしないので、公立文化施設で公共性の高い事業として実施するという判断はあるのではないかと。

びわ湖ホールでは、芸術家を雇用して彼らに鍛錬の機会を与えると共に地域に還元させていき、それを両輪として最先端の作品もつくりながら地域ともつながる取り組みをされていると伺った。さらに、これを文化と経済のつながりの中で、さまざまなコミュニケーションの中で継続するという姿は素晴らしいことだと思う。こうした活動が、全国で盛んになっていくことを願っている。

大津曳山祭り 源氏山の1/4ミニチュアがついに完成披露 —彦根仏壇の伝統技術を活用—

井上 昌一 (個人会員)
株式会社井上 代表取締役

私は、「彦根仏壇」の製造販売を生業としております。彦根仏壇は、大型で立派なことが有名で、国の伝統的工芸品に指定されています。しかし、彦根仏壇の出荷額は、最盛期の1/3まで落ち込み、職人の高齢化、後継者不足は切迫した問題となっております。

そこで、私どもが所属する彦根仏壇事業協同組合では、2015年から、彦根仏壇工部七職《木地・宮殿・彫刻・漆塗り・金箔押し・蒔絵・鋳(かざり)金具(かなぐ)》の伝統技術を活用し、仏壇以外への技術の転用による生き残りの試みとして、祭りに使われる曳山・山車のミニチュアの製作や販売の可能性を検討してきました。事業化へ向けて調査・研究を行った結果、各地域に曳山・山車が存在し、ミニチュアの需要があることを把握し、試作品を製造することになりました。

2016年、大津祭が国指定重要無形民俗文化財に指定され、さらに盛り上がる大津祭の曳山をミニチュア化することで、世間への認知度を高め、インバウンドも含めた多くの人々にPRすることができます。また、滋賀県を代表する伝統文化(大津祭)と伝統工芸(彦根仏壇)がコラボすることで、滋賀県がone teamとして地元意識が高まると



考えました。運良く大津祭曳山の一つである源氏山のCADデータがあり、お許しを得てそれを活用して製作することとなりました。2017年からNPO法人大津祭曳山連盟様をはじめ、関係団

体のご協力のもと、源氏山の1/4スケール1基を試作製造することになりました。完成まで3年計画で、1年目は木地・宮殿、2年目は彫刻・漆塗り、3年目は鋳金具・金箔押し・彩色・組立てと進めていきました。資金不足を補うため、クラウドファンディングにもチャレンジしました。そして、遂に2019年10月6日(日)JR大津駅前広場にて、盛大に完成披露除幕式を行うことができました。その後、JR大津駅コンコースにて大津祭終了まで展示させていただきました。今後も、地方創生に有効活用するため、大津の公共の場所やイベント会場で、展示していく予定です。

今回のミニチュア試作を足掛かりに、そのノウハウを蓄積し、全国の曳山のミニチュアを受注し、彦根仏壇の伝統技術を活用した新たな需要を開拓していきたいと思っております。その結果として、この取り組みが、伝統技術の伝承・後継者育成につながっていけばと考えています。

最後に、この事業に携わっていただきました皆様方のご支援に感謝申し上げます。



ガリ版の文化を発祥の地・滋賀から発信～未来の表現ツールをめざして～

新ガリ版ネットワーク (団体会員)

会長 山中 壽勇

ガリ版を知る人は、今や40代後半以上となってしまいました。1970年代には学校には必ずあった印刷器は、滋賀県発祥だったのです。1894(明治27)年に東近江市の堀井新治郎によって発明、発売されました。正式名は謄写版と言い、ヤスリの上にロウ原紙をのせ鉄筆で版を作る時に出る音からガリ版という名で親しまれてきました。ガリ版は、当初軍事通信に、その後、行政機関、学校等々でも使用されるようになり、大正期には全国に広まりました。また、映画、文学同人誌、労働活動機関紙の発行等々にも使われ、大衆文化の隆盛に大きな役割を果たしました。さらに大正期以来、孔版美術という新しい芸術活動が開花し、多くの先駆者たちにより技法を進化させ数々の優れた美術作品も生み出しました。1980年代、ワープロ、パソコンの普及と共に事務用品としての役割を終えました。しかし、未だガリ版が生み出す手刷りの文字や絵の温もりを愛する人や、若い世代が新しい表現ツールとして使おうとする人たちが増えてきています。

こういった愛好者のために、器材の提供や、史資料、情報を収集、発信するため1994年、東京を拠点にガリ版ネットワークが発足されました。その後、2008年に前身の活動を継承して発祥の地・滋賀県で新ガリ版ネットワークを立ち上げました。事務所は、東近江市立ガリ版伝承館(1998年開館)内に置き、12年目を迎えます。活動のひとつに全国から送られてくる器材の受け入れがあります。全国で最大の器材保有数を誇っています。この器材を使用できるように修理し、資料として保存したり、欲しい方にお分けしています。出前でワークショップも年間10回以上、伝承館での体験指導も数多く行っています。また、ガリ版による版画作家に対して販売等の支援もしています。この11月には、ガリ版伝承館企画展をネットワークが主催し、500名に及ぶ入館者がガリ版の歴史・文化に触れていただきました。

これからも、全国のガリ版愛好家との交流を図りながら、過去のものというだけでなく、温もりを感じる新しい表現ツールとして広めていきたいと考えています。



ガリ版のある風景
—学校に刻まれた手刷りの温もり—



企画展の様子



体験教室の様子

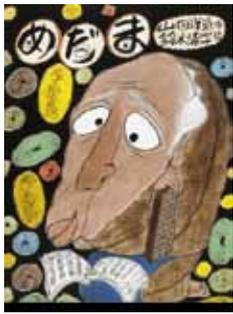
連載 レポート近江屋考

「きのう、きょう、あす」 ⑥

歩くブログ記者 岸野 洋

京都新聞社友、前・(公財)滋賀県文化振興事業団理事長

出歩いて「近江屋」の看板見つけると、ついどんなお店かな〜気になるのは、このレポートがあって、である。大阪の鶴橋行って、質屋の近江屋さん看板。駅前から→表示があり、そのとおりに行くと住居兼ねた3階建て大きな質屋さん。なんで、大阪で、屋号が近江屋か、滋賀とのご縁は〜とお話しを聞きたかったが、知人との約束の時間あって、また今度にして、今回は落語に出てくる近江屋レポートである。



大阪・谷町六丁目、笑いのカルチャーセンター。創作落語作家のさとう裕さんが「落語の始まり」「江戸と上方の違い」など、シリーズ講演を聴きに行って、5回目の酒の噺で「試し酒」に近江屋が出てきた。大津の元滋賀会館であった「わらげん寄席」でも、映画監督山田洋次さんの創作落語「めだま」を桂九雀さん=写真右下=が喋って、近江屋源兵衛が登場している。

「試し酒」は、さとう裕さんによると、五代目柳家小さんさんがよく演じたという。小さんさんにさんを重ねると、サンサンナナ拍子みたいだし、小さん師匠と書くほうがわかりやすい。この落語をパソコンのユーチューブ(YouTube)で聴くと、呉服仲間の伊勢屋さんへ、酒を断った近江屋が訪ね行って、酒の話になり連れてきた丁稚の久蔵がいっぺんに5升飲めるといふ。伊勢屋さん、それは無理では〜というも、近江屋さんは間違いないと言い、久蔵さんが試しに二人の前で5升飲み切る。どうオチをつけたか、これはユーチューブで聴いてもらうことにして、もう一つ、近江屋源兵衛さんである。

かつて滋賀県文化振興事業団があった滋賀会館。いま、NHK大津放送局庁舎建設中だが、平成20年9月にここの文化実習教室で、笑ってもっと元気をだそう会、略称わらげん寄席が始まった。世話人は竺

文彦龍大教授ら有志で、名づけ親は当時京都新聞滋賀本社編集局長だった十倉良一さん(現京都新聞論説委員)。会館閉鎖で2年後に旧大津公会堂に会場を移して、38回まで続いて今年11月に幕を閉じた。ご苦労さん会のおり配布の過去の演目一覧表で、近江屋源兵衛の「めだま」は平成21年6月、第4回で九雀さんが演じていた。

この近江屋さんは、べっ甲問屋さん。身代を1文でも〜と、いつも大きな目玉で店をにらみまわしていたが、ある日病であの世へ…というくだりから始まるケチケチ話。わらげん寄席の世話人で事務局局長の絵本作家、鈴木靖将さんが絵本=写真左上=にして、今も全国販売している。

近江屋さん、落語だけでないなあ〜と、池波正太郎さんが書く鬼平犯科帳を調べると、全24巻中の第12巻に出ていた。長谷川平蔵の息子、辰蔵が通う江戸は寛永寺近く谷中のお茶屋さんが近江屋だった。

近江屋は今も全国に店舗多く、落語にも、本にも登場しての「三方よし」健在である。



第10回総会・講演会のご案内

滋賀県出身の澤田康彦さん。四年前の「暮しの手帖」編集長として離れてきた魅力的な地方暮らし人を通して、浮かぶるさん「たじまは近江」のこれからをお聞かせします。

ふるさと、
どんどん、
ちかくなる

大好きな
だいたい
すきな
近江

講演
澤田 康彦さん
編集者・エッセイスト
前「暮しの手帖」編集長

文化・経済フォーラム滋賀
第10回総会 **講演会**
2020.2.11 (火・祝) 14:00~15:00
会場 琵琶湖ホテル3階「瑠璃」 (受付 13:30~)
大津市浜町 2-40 (京阪電車びわ湖浜大津駅から徒歩5分、JR大津駅から無料シャトルバスで約5分)
ご来場は公共交通機関をご利用ください。

参加無料 *参加のお申し込みが必要です。

プログラム 1

14:00 ~ 15:00
■講演 講師：澤田 康彦 氏

15:05 ~ 15:20
■「文化で滋賀を元気に！」する提言発表

15:25 ~ 15:40
■「文化で滋賀を元気に!賞」表彰式

15:45 ~ 16:05
■びわ湖ホール声楽アンサンブル演奏会

以降の参加は
——文化・経済フォーラム滋賀への入会が必要です。——

プログラム 2

16:15 ~ 16:45
■総会
令和元年度事業報告、令和2年度事業計画

プログラム 3

16:50 ~ 18:10
■交流会 (参加費6,000円)

令和2年度
会員継続のお願い

文化・経済フォーラム滋賀の活動は、会員みなさまの会費で運営されています。1月は会員継続手続きの月です。ご案内を郵送させていただきますので、令和2年におかれましても、ぜひとも引き続き会員をご継続いただき、「文化で滋賀を元気に!」する活動にご参画いただけますようお願い申し上げます。